学校だより

６月号
横浜市立大道小学校
令和５年５月３１日

← 学校 WEB ページはこちらから

副校長　山方　健一

「自己有用感」が育まれるとき

「やっと一年生と一緒に帰れる!」

ある日の下校時、高学年の児童数名がこう叫びながら、B棟昇降口に駆けていく場面に出くわしました。5月1日（地域家庭訪問一日目）、高学年の児童と1年生の下校時刻が初めてそろう日のことでした。1年生の入学を心待ちにし、晴れて大道小の一員となった1年生たちを心から歓迎する上級生の温かい気持ちが伝わってきました。また、休み時間になると、6年生をはじめ、様々な学年の子どもたちが1年生の教室を訪れ、一緒に遊んだり、1年生の話し相手になったりしている微笑ましい光景が、毎日のように見られます。

大道っ子のやさしさや思いやりの心は、元々に備わっているところもあるかもしれませんが、学校でも、子どもたちがよりよい人間関係を築けるよう、意図的に設定している時間があります。それが、「なかよし活動」です。初めにふれた、上級生が1年生とすすんで関わりをもち、下級生も上級生を慕うこの関係性は、「なかよし活動」が生み出すよさだと私は感じています。こうした異学年での活動は、上学年の児童が下学年のことを考えながらリーダーシップを発揮するとともに、「こんな上級生になりたい」という下級生の憧れの気持ちを育むことにもつながります。

「自己有用感」という言葉があります。周りの人の役に立った、相手に喜んでもらえた…など、他者から認められることで生まれる感情です。「なかよし活動」でも、子どもたちの「自己有用感」が育つ場面が多々あります。例えば、高学年の児童が低学年の子に何かを教えたり助けたりして、「年下の子たちの役に立っている」「『ありがとう。』と言われてうれしいな」と感じるような経験が積み重なれば、学校という社会のなかで、自分が大切な存在であると実感することができます。

「自己有用感」を高めることは、子どもの社会性を高め、「人と関わることが楽しい」「人の役に立ちたい」という気持ちが育つことにつながるそうです。確かに、周りから称賛されたり感謝されたりすることで確かな自信となり、それがさらなる意欲につながることは、大人になってもありますよね。だからこそ、子どもががんばっていることや努力したことをしっかりと認めたり、適切な声かけやタイミングで褒めたりすることはとても大事であると痛感します。

私が子どもの頃は、放課後に近所の公園や空き地、学校の校庭などで、いろいろな学年が入り混じって遊ぶことがよくあったように思い出されます。しかし、その頃に比べ、遊びのなかで体験できた異年齢同士のコミュニケーションが減ったことに加え、ここ数年のコロナ禍の影響で、異学年のみならず、人との関わり合い自体が希薄になってしまった現状があると思います。

社会のなかで生きていくうえで、自分の考えをもち、相手の気持ちを受けとめ理解しようとすること、他者と意思疎通を図りながら協働することなど、いつの時代も人と人とのコミュニケーションは大切なものです。大道小の「なかよし活動」が、様々な人とよりよく関わっていく力を身に付けていくための一助となるよう、今後も努めていきます。